



Hiroko Tokumine  
Collection Show 2019

Hiroko Tokumine  
Lolita Wedding

～桜姫と藤の木の精～

## 目次

p04-p55	出演者紹介・ドレスお披露目
p56-p63	ファッションショーイベントレポート
p64-p65	新作ロリータドレス紹介
p66-p67	藤姫&桜姫インタビュー
p68-p69	いかさんライブレポート
p70-p71	甘党男子ライブレポート
p72-p77	藤姫の物語「藤花と、月と」

## 出演者様

青木美沙子 深澤翠 AKIRA 黒崎真音 ルウト  
星名桜子 伊藤芽衣 ちゃんもも◎ 倉坂くるる  
山吹りょう 鎌田紘子 のむらこいち 谷琢磨  
雨情華月 竹内星菜 錦織めぐみ 有坂愛海  
Mayuka 神や 天見綾沙 仲谷瑠夏 中山みる  
いかさん 甘党男子  
稲森寿世 絵里 坪内帆波 増田美咲 まめ蔵



Hiroko Tokumine  
Colla Wedding

2019年10月26日に開催された  
Hiroko Tokumineロリータウエディング  
コレクションディナーショー

ブランドイメージキャラクターである桜の木の精霊「桜姫」  
今回のタイトルにもなっている藤の木の精霊「藤姫」など  
架空の姫君、童話のお姫様などをモチーフにした  
数々のプリンセスドレスをお披露目いたしました

まるで童話に出てくるお城のような内装の  
「ホテルスプリングス幕張」を会場に  
その優雅な空間を藤の木の精が眠る場所に見立てて  
開催された華やかな宴の様子を  
皆さまにお届けいたします



桜姫役  
錦織 めぐみ [Twitter] @memetan\_0705





藤姫役  
深澤 翠 [Twitter] @fukasawamidori





青木 美沙子 [Twitter] @aokimisako





AKIRA [Twitter] @dis1akira





黒崎 真音 [Twitter] @kurosakimaon









星名 桜子 [Twitter] @sakurakohoshina





伊藤 芽衣 [Twitter] @itoumei





ちゃんもも© 【Twitter】 @chanmomochan10





倉坂 くるる 【Twitter】@kururu\_45







鎌田 紘子 [Twitter] @hirokokamata12







谷 琢磨 [Twitter] @tani\_takuma













Mayuka [Twitter] @mayukawaiidoll











中山 みる [Twitter] @mill\_kmkks







稲森 寿世 [Twitter] @inamori\_hisayo







絵里 [Twitter] @erisweetfairy1  
坪内帆波、増田美咲、まめ蔵





甘党男子 [Twitter] @amatou\_official



木村ともや



三上義貴



菅井義久



石塚利彦



安田一大



室井一馬



成瀬敦志



神久保翔也



第一部

# White Lolita Wedding Collection

Hiroko Tokumineのこだわり、日本伝統工芸の川俣シルク100%の白ドレスをはじめ  
パーツごとに組み合わせ自由な特徴を活かした様々なドレススタイルをお披露目♡





## 第二部

# FairyTail Wedding Collection

童話のお姫様や、架空の国の姫君・殿方が大集合♡

カラードレスを中心とした、ストーリー性の高い童話シリーズのドレスをお披露目します!









"まさに王道"乙女の永遠の憧れ  
といえる純白のドレス。  
上品なデザインで、皆さんを  
誰もが振り返るプリンセスに  
してくれたいと思います\*"

### 花染衣ロリータドレスセット



ウェディングラインの中でも一番人気の「花染衣桜」のドレスを、ロリータラインに落とし込んだドレスセット。特徴的なリボンのほごデザインを、ボレロのお袖だけではなく、ヘッドドレスにも取り入れました。ドレスとほぼ同じ設計図を使うことで、シルエットの美しさは残したまま、バックは編み上げからシャーリングにしたことで、一人でも着脱可能に!

【セット内容】  
トップス、スカート、ボレロ、ヘッドドレス  
チョーカー (リボンクリップ付き)  
※スカートとボレロの蕾飾部分はクリップで取り外し可



オーロラのような光沢がある  
オーガンジーが光の反射や動きで  
キラキラするのがキュンとします!  
女の子の好きが詰まったドレスで  
とっても可愛いです♡

### 双木昭夫さんコラボロリータドレスセット



「なまいきりボン」のイベントでもお披露目があった、双木さんのコラボドレス。取り外し可能なボンが入ったオーバースカートの特長です。スカートの端の部分から、自分でボンを入れたり抜いたりすることができます。ボンありでは美しいシルエットを出すことができ、ボンを引き抜けばふわふわとした動きやすいワンピースに、ロリータより少しカジュアルな、ガーリーな着こなしもお楽しみいただけます。

【セット内容】  
ジャンパースカート、ブラウス、オーバースカート (ワイヤー取り外し可)、髪飾りリボン2点、髪飾りリボンピン8点



一つ一つのディテールが細やかで  
とても可愛いドレスです!  
これを見れば誰でも白雪姫に  
なれると思います♡

### 白雪姫ロリータドレスセット



最近人気の童話モチーフのウェディングドレスシリーズを、ロリータラインに落とし込んだ「白雪姫」ドレスセット。森のイメージを色濃く出した、葉っぱやお花の生地が重なったガーデン風のデザインが特徴です。コルセット部分は硬めの生地で、シルエットが綺麗に出ます。ボンなしのため、動きやすさも兼ね備えているのが嬉しいポイント。

【セット内容】  
トップス、スカート、胸元の蕾飾コサージュ (取り外し可)  
ティアラ、イヤリング

## 新作ロリータドレス・トークショー Wedding Lolita Dress Collection

新作のウェディングテイストのロリータドレスをお披露目♡  
デザイナーによる制作秘話トークショーもありました!



## 桜姫と藤姫のおはなし

藤の木の精霊の藤姫さまが住まう聖なる森。

この森で、桜の木の精の桜姫さまは、密かに藤姫さまのお祝いを計画されていたよう。

華やかに装った姫君さまが次々に集まる様子はとても華やかなものの、  
ちよびり天然な桜姫さまは、肝心の藤姫さまへの招待状を渡しそびれてしまったのです。

気まぐれな藤姫さまは、森のざわめきに目を覚まし、  
自分にだけ知らされていなかった宴に困惑して、少し機嫌を損ねてしまいましたが、  
桜姫さまのとりなして、藤姫さまも正装に着替えて宴に参加することに。

藤姫さまの気分に合わせたかのように、  
濃い紫のドレスから、淡い紫の華々しいドレスに変身するのでした！





## いかさんライブパフォーマンス Under The Sea

2018年ミュージカルでも演じたいかさん&ダンサーズによる「Under The Sea」  
今年もいかさんは「自分をロブスターと思ひ込むカニさん」になって登場♡  
ダンサーズもさらにパワーアップした華やかなパフォーマンスでショーを彩ってくれました!



## 甘党男子ライブパフォーマンス

甘党男子はスイーツをモチーフにした曲を2曲お披露目♡  
ショーの序盤を盛り上げてくれました!!  
そのままの王子衣装でファッションショーにも登場♪



びく史上初めて  
被り物を装着します！  
頭からつま先まで  
世界観を表現したいと思います！  
黒衣装だけど水玉やレースで  
かわいいんですよ！

木村ともや



第一印象が「異っ白！」  
肌が白なので、白をチョイスして  
いただいたのが嬉しかった！  
何より白なのに着太りしない！  
シルエットが綺麗！  
素敵に着こなしたいです！

三上義貴



メンバー1新感覚が強い  
衣装を着ることになりました！  
3日間かけてピースを縫い付けた  
努力の結晶という衣装  
とても輝やかなので  
是非見てほしい！

菅井義久



落ち着いた色合いが大人っぽい  
とても綺麗な衣装です。  
このお色味は新郎衣装としても  
珍しいものなのだから。  
いつも違った表情を  
見せられたらと思っています。

石塚利彦



まるで異国の王子様みたい！  
ひとつひとつの装飾まで  
すごく可愛い衣装で  
輝しかったです！  
なんだか異世界感もあって  
ワクワクしました☆

安田一大



コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？

室井一馬



アイドル活動をはじめて  
普段着ではなかなか着ない  
豪華な衣装を着ることも増えましたが  
中でもダントツに優好み！  
一生に一度はこんな衣装に  
身を包みたいと思うような  
素敵な衣装です！

成瀬敦志



コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？  
コメントもらえてないかも？

神久保翔也

「藤花と、月と」

著・湊 奏

まどろみの中を、意識がたゆたう。浮いて沈んで、また浮いて。後どれ程、繰り返せばよいのだろうか。この無為な、久遠を……

「藤姫様、藤姫様！」  
山あいの開けた土地に、黄色い声がこだました。金切り声にも似たそれを聞き、彼女は午睡の湖から意識を浮上させる。

樹齢千年に近いとも、超えているともされている、藤の巨木の根元に彼女、藤姫はいた。すべての藤の頂点に君臨する大藤の精霊。すべての藤は彼女の眷属だった。

そんな彼女の元に嬉々として走り寄ってくるのは、黄花粉の精。名をサリと言った。  
「大妻です藤姫様！」

「……サリ。そんな金切り声を上げずとも、聞こえておるわ……」  
彼女はあくびをかみ殺しながら、いかにも大儀そうに体を起こす。

「そんなことはありません！ 普通に呼んでも、姫様起きないじゃありませんか！」  
「……」

「反論の余地はなかった。彼女は確かによく寝ているし、その眼りはいつも深い。遠慮がちに声をかけられたくらいでは、起きることはほとんどない。」

「それで、何じゃ、おぬしはいつも慌ておるが、今日はいつにも増してうるさいのう！」  
「そうだった！ 姫様、すくにお支度を！」 松の精のこ兄弟姉がいらっやいます！」

「それ聞いて、彼女は色めき立った。松の精の世では美男美女ともてはやされ、皆の憧れの的であった。」

「それからは慌ただしいものだった。藤の長として彼者たちを無碍にできぬというところもあるが、憧れの兄弟姉が訪ねてきたとなれば眠気など遙か彼方へと吹き飛んでしまふというもの。本来なら突然の訪問など無礼極まりないのだが、そのような此事は紙くすも同然であった。」

「松の兄弟姉が通されたのは、しばらくしてからであった。藤の長としての正装、淡い紫色の華飾衣に袖を通し、人ならざる者の色を湛える瞳は柔和に微笑んでいた。」

「赤松殿、黒松殿、たいそう待たせてすまなかつた！」  
「いや、こちらこそ突然の訪問だ。通していただいて感謝する！」

「松の樹皮を想わせる小麦色の肌をつややかで、端正であるが野性味を宿した容貌である赤松の精。彼女のさつぱりとして気つ風の良い姉御肌は、まさに憧れずにはいられない魅力であろう。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

対して黒松の精は、筋骨隆々の肌は海風に焼けて黒々と鈍く光り、精神な顔立ちもまた、乙女の心を掴んで離さないだろう。かの大男こそ精霊唯一の益荒男だった。

黒松の精、篠は、静かに腰を下ろしたつもりだろうが、その巨体故、どかりと地をならしてしまった。赤松の精、篠は、そんな弟を窘めるように軽く小突き、しかし自らも丁寧とは言いがたい粗野さを腰を下ろす。

「して……今日どのような御用向きか？ お二人が連れだつてこのような急な来訪、よほどの事とお見受けするが……」

「正直なところ、彼女はあくまで一つの種を統べる長だ。体裁は大切だった。」  
「……ふうむ、そうさな。精霊にとっては此事かもしれぬ。しかし、そなたにとっては大事かと思つてな。急ぎ参つた次第よ！」

ほんの少しの間をとって、篠は口を開いた。  
「そなたに縁ある人の子が、生を受けたようだ！」

「彼女は静かに息をのんだ。その息づかいには、きつと誰にも聞こえなかつただろう。」

「……風の噂で、聞き及んでおりますが！」  
その声を絞り出すのに、利那の間と、多くの氣力を必要とした。もはや遙か悠久の彼方、彼女はまだ幼い苗木だった頃の話を、思い出すにはいささか以上に苦い、遙か過去の話だというのに。

「……会うてやらぬのか？」  
篠は、ぼつりとこ零すように問うた。篠は彼女ほど長くは生きていない。当時のことなど知るよしもないのだが、後世に生まれた者ですら話に聞くほど、彼女と人の子の話は鮮烈であった。

「……会う、理由がない。なにより、会わない理由は山ほどある。おわかりであろう、黒松殿！」  
言外の言葉。それは精霊の掟、人と関わってはならぬ。掟だから、そして一族を統べる者としての責務、責任。なるほど、道理である。」

「しかし、ならばなによえ堂々としておらぬ。大地に根を張り巡らせ、人の世を見守つてきたのか。なぜ……そのように沈鬱にくれているのだ！」

その言葉に、怒気ははらまれていた。見ていて痛々しいと、彼女もまた、指摘され初めて己の喪情さをも取り繕っていない事に気がついた。しかし、そうであったとしても自らの役割を放棄する理由には遙か遠い。」

「まあ落ち着け篠。すまぬな、藤の長よ。我が弟はそなたに懸想しておるのだ。悪気はない。許せ！」  
「姉上……」

「弟をからかう姉、そのやりとりは、微笑ましいものであった。そして、縁が彼女を氣遣つてのことだからという事は、考えずとも分かつた。」

「だがそうだな。良ければ聞かせてはくれぬか。我らは伝え聞くのみ。かつて何があつたのか。そなたの口から語つてはもらえぬだろうか？」

「彼女は視線を遠くに投げた。しかしその瞳は現在を写してはおらず。」  
「……そうさな。一つ、昔話をしようか！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」



「ああ、我が友は十数年共に過こしたというのに、我が名を知らぬと申す。なんと嘆かわしいことか．．．」  
「な．．．っ．．．、仕方ないではないか、言葉之交わすことができたのはつい先ほど。それまでは私が話かけていただけのだから．．．」  
「いやいや、すまぬ、そういうことではない」  
彼女はくつくつと楽しそうに笑う。

「我が精霊は、誰かに名付けてもらわねば名など持たせぬのだ。大抵は母か父が名付けを行っているのだが。人の子としてどうであるか？ しかし私は名付けてもらう前におぬしに託された。だからな、わかるであろうか？」  
名付けるのはおぬしだ、と。鎌は神妙な面持ちで思案した。そして、  
「おぬしは、おぬしだ、どうか？」

「おぬしは、おぬしだ、どうか？」  
告げられた名に、しかし返事は無い。鎌は恐る恐るといったように彼女の顔を見やると、鳩が豆鉄砲を食らったように呆けた顔をしていた。そして次の瞬間、このころと楽しそうに大笑いするのだった。

「葵！ そうか、葵か、藤に葵とつけるとは、おぬしもなかなか豪胆よな。ふふふ、いや不満はない。我が花の色からとったのだろうか？ いいとも、わたしは今日から葵と名乗ろう！」  
そして葵と鎌は独り一層の親交を深めていった。文字通り毎日のように語らった。鎌の今までの独り言は、独り言ではなくなつたのだった。

葵に人の国や生活のことはよく分からなかったが、鎌の悩みや迷いに對し、葵なりに正しさを説いた。己が正しきと思うことをなし、国を清廉とせよ、と。葵の助言があつてのことか、鎌は自らの君主にたいそう、氣に入られ、側近として取り立てられることとなつた。鎌と葵は、良き友であつた。

しかし、その昔き日々はそう長くは続かなかつた。時の世は乱れており、鎌の仕えた君主が「決行は、明日か」  
「ああ、我が君を王に、そしてこの国に正しき治世を」  
葵の問いに、鎌は決意に満ちた表情で、力強く領いた。あの日、沈み悩んでいた鎌は、そこにはもういなかった。雄々しく猛々しい、漢の出で立ちであった。その成長を葵はうれしく、そして愛おしく思つた。三十年、共に育ち、時代を駆け抜けた友は、友である以上男の顔をしていて。

「鎌よ、これを持って行くがよい。わたしの枝の一本、葉と花がついたものが入つておる。まだ力が強くない故、大精霊の加護、とはいかんのだが、我が分身だ。きつとおぬしを守つてくれよう」  
差し出された籠には、なるほど藤の枝葉、そして花が入つていて、手折られたものだというのに瑞々しく、淡く光つているようにもみえた。

「ありがたく、頂戴する。我が友、葵よ、どうか我が身の無事を折つてくれ」  
「もちろんだ。ここでいつもの通り、おぬしの帰りを待とう」  
交錯する視線は、互いを強固に信頼したものであつた。鎌の無事を、信じて疑わぬものだった。

葵は婚儀の際にたいそうむくれていたが、子ができたときは大いに喜んだのだった。  
鎌は妻の家にかよりより、自らの家と語らう日のほうが多かつたように思う。生まれた子には、葵が名付けを行った。真人と。父のように真っ直ぐに育て、願いを叶えた。

過こした時間は平穏そのものだった。時折戦の氣配がはしたものの、王の側近となつた鎌が戦場に向かうことはなく、子はずくと成長し、鎌もまた、同じ時間をかけて少しづつ老いていった。それは幸せな時間だった。

ある日、鎌が家を空けている際に、葵に思わぬ客が訪ねてきた。  
「健勝そうすね。我が娘よ」  
母上．．．」  
葵の母、先代藤姫が森を抜け、訪ねてきたのだった。

「お久しぶりで、母上。母上もご健勝そうでなにより。して、本日はいかがされました。娘の顔を見に来た、と。母上にはご存じではないでしょうか？」  
娘の顔を見に来ただけ、というのでは可哀しい、というわけではない。しかし、母は一族を統べ、神聖なる森を治める者。その立場は想像する以上に重い。ただ娘に会うためだけに、森を離れられる道理はなかつた。

「．．．ええ、今日はそなたの今後のことと、忠告をしに來ました」  
三十五年ぶりに会う親子。精霊にとつて三十年とは、大した時間ではなかつた。  
葵は神妙な面持ちで母の言葉を受けた。

「．．．私の寿命は、もう長くないでしょう。娘よ、そなたを次代の藤姫に任じます」  
千年を超えて生きてきた母の、精霊としての寿命が終わろうとしている。精霊である母が死ねば、その元である大藤も枯れるだろう。しかし．．．  
「なぜ、私なのですか？ 私は人の世で、人の子と共に生きてきました。時代を駆け抜けて参りました。精霊との交流もわずかなもの。母上には子がまだいるでしょう」  
「いいえ、跡継ぎはそなたしかおりません。藤の長は大藤が直系の勤め。私もまた、我が母よりこの地位を、彼の地を受け継ぎ守つてきたのです。それに、そなたは人の世で生きてとはいえず、人ではない。もう、こちら側へ帰つてきてよいものではありませんか？」

「そう、三十余年は人の世でこそ一生に近い時の流れだが、精霊にとつてはほんの一瞬のことではなかつた。人と精霊では、生きる時間が違うのだ」  
「そなたも聞いてはどうでしょうか。知ったときには遅かつたとは思いますが、精霊は人の子の関わりを禁ずる。その意味が、聡いそなたなら分らないはずはないでしょう」  
精霊は人の子との関わりを禁ずる。精霊の長が定めた掟だ。時折、風の精などから聞いてはいた。しかし、もはや鎌は友であつたし、掟だからといって姿を隠すことなどできやうはずもなかつた。しかし、ここちの鎌を見ていようと、いやでも思い知らされる。

同じ時間を、決して生きてはいないのだと。  
日ごとによくすぐと育つていく真人。同じ時間をかけて、少しずつ年老いていく鎌。きつと瞬く間に鎌は．．．  
「しかし．．．、せめて彼が．．．、彼の最期の時まで待つてはいただけませんか」

翌朝早く、鎌は顔を蹙つた。葵はその背を見送り、いつとも鎌と語らう縁側で友の帰りを待つた。そしていつの間にか眠つてしまつた。ましろみの中で、葵は鎌の夢を見た。幼い頃の鎌は、百面相もかくやというほど表情豊かな子供であつた。その顔を眺めるのが好きだつた。言葉之交わせるようになってからは、鎌はいつも笑顔だつた。時折みせる真剣な顔は男のそれであつた。柔らかな日差しの中で午睡し、なんと幸せな事であつた。

突如、手のひらにはじけるような痛みを感じ、葵は目を覚ました。鎌に持たせた彼女の分身がその役目を果たして、朽ちた感覚があつた。役目を果たさねばならぬほどの、何かがあつたと言ふことだ。しかし、鎌の顔を知らうにもその術はなかつた。  
「鎌よ．．．、我が友よ、どうか無事でいてくれ」  
その日、鎌は帰つてこなかつた。

「葵！ 今帰つた！」  
庭に鎌の、友の声が響き渡つた。鎌は葵の姿を見つけるとすずくに駆け寄つた  
「我が君は、我が王となつたぞ。これでこの国もあるべき姿となろう」  
「．．．おぬしよ、他に言うべきことあるのではないか？」  
興奮した鎌子の鎌とは対照的に、葵はふつと怒つてこなかつた。

下ろしたのも束の間、安堵したら今度は怒りがわいてきたのだった。  
「わたしは、どれ程、心配した、思つておるか！ 我が分身は朽ちてしまつし、おぬしに何事があつたのではないかと、死んで、しもつたのか！ はないかと．．．」  
葵は鎌の胸ぐらに掴み、言葉の節目節目で鎌を揺さぶつた。そして彼のそこに顔を埋めた。風も吹いていないと言ふのに藤の木がざわめいてた。

「あいや、すまぬ、後始末に少々時間がかかつてな。文を出そうにも、そなたにどう届けたいのか、わからなかつたものでな．．．」  
文を書くことはできやう。しかし、葵にあっては誤にもいかなかつた。葵と話せるのは鎌ただ一人。家の者になんと聞けばよいのか分からなかつたのだった。  
「そうだ、背中を切りつけられたと思つたのだが、傷一つなかつたのは、やはりそなたの加護のおかげだつたのだな。命拾ひをした。おかげでうして、またそなたと語つたことができた」  
「そうじや！ 感謝せい！」  
顔を上げた葵は、泣き笑いで言い放つた。

それからの二人は、何事か引裂かれることもなく、仲睦まじい時を過こしていった。王命により、その年まで独り身というは体裁が悪いということでも、鎌は妻を娶ふこととなつた。

絞り出すような、沈痛な声。今まで考えぬようにしてきたことを、今まさに眼前に突き付けられたのだった。然りとて、考えぬようにしていたに過ぎぬもの。もはやとくに分かつてた。  
「自ら次の道を進むのですか。人の子の寿命は五十年から六十年、もうあと二十年程度ならば、問題ないでしょうか」  
「．．．感謝、いたします」  
「人の子と己は違ふのだということ、ゆめゆめ忘れてはなりませんよ」

その夜、鎌は葵の様子がおかしいことにすぐ気づいた。  
「一体どうしたのだ。今日は口数も少ない。それに、沈痛な面持ちではないか。なにかあつたのか？」  
その問いに、葵は応えることができなかつた。その無邪気すぎる問いに、精霊の都合など伝えることなどできなかつた。版に伝えたのだ、鎌が氣に病むだけだつた。告げることで悲しみが蔓延するのなら、仮初めでよい、せめて幸せな日々を送りたいと、彼女はさう思つた。

「なんでもありませんよ。おぬしも随分長生き合ひになつたな、と懐かしんでおつたのだ」  
「そうだな、そなたが友でいてくれて、本当によかつた」  
その素直な心に、葵は涙しそうになるのをすんでのところ、堪えた。  
「これからも、ずつとおぬしの側におるよ．．．」  
おぬしの最期の時まで、と口に出すことは、なかつた。

その夜は満月であつた。  
後の世で鎌の子孫が、一族を満月になぞらえて詩を詠む。

それから、鎌は普段と変わらず、葵は彼のの日々を大切に過こした。彼の一挙手一投足を記憶しようとはかりに、彼を見つめていた。

鎌は葵の視線の変化になんとなく気がついてはいたが、何が変わったのかはよく分からなかつた。  
真人も立派な少年となり、王から養子に出された、義理の弟である史入ととも、父の後を継ぐべく勉学に励んでいた。この成長は何よりも代がたい喜び。このとき葵は、二人の息子を鎌は年老いてはいつたが、それでも頑健であつた。弱るところより精力にみまぎっているようでさえもあつた。彼が死ぬところなど、想像できなかつた。

しかし、幸せな日々は突如として終わりを告げた。  
王と狩りに出かけた折、鎌が落馬した。

王と狩りに出かけた折、鎌が落馬した。

「葵よ……、そなたが、人であったのなら、どんなに、良かったであろうか。私はな……、そなたをこそ、妻に迎えたかった。そなたと、子をなし、そなたと、夫婦として、生きていきたい。……、もった……、そなたと共に、生きていたかった。なあ、葵よ。愛していたのだ……、愛して、いるのだ……」

他者には見えぬ想い。どれ程愛していたとしても、君主に使える身なれば、その想いを遂げることなどできようはずもなかった。この想いは墓の下まで、持つて行くつもりだった。しかし、いざ自らの命が消えそうになると、告げずにはいられた。友ではなく、葵を愛する男として、言葉を聞いてはしなかった。

葵もして、涙を止めた。出来はしなかった。

「ああ、葵よ……。もう一つだけ、我が儘を、言うても、良い、だろうか……」

「ああ、いいとも。なんでも言うてみよ」

力強い言葉と眼差しで、葵は鎌の言葉を待った。

「葵よ……。わたしと、夫婦となつては、くれないか……」

「……っ！」

その言葉は、いつからか葵が待ちわびた言葉であり、もはや決して叶わぬ祈りであった。しかし、葵はその瞳に涙を湛えながら、精一杯の笑顔で鎌に向けた。

「ああ、もちろん……。もちろん、だとも……。わたしをそなたの、妻に……」

その後は、声にならなかつた。悲しみは慟哭となり、屋敷を、庭を、天を衝いた。

「すまない……。すまないなあ、葵……。我が欲に勝てず、やはりそなたを、傷つけてしまった……」

鎌の言葉に、しかし葵は返すことができなかった。ただ、首を横に振ることしかできなかった。

「そなたと、夫婦になれたら、姓をな……。変えたかったのだ。そなたを生きた、証として……」

受け取つては、くれぬか……。『藤原』を。

「藤原……。そなた、覚えて、おつたのか……」

もう、五十年前のこと。あの大藤がそびえ立つ、広場の草原を。

「……。わかつた。受け取る。我が夫婦の証として」

翌日、この国の王が見舞いに行つてきた。そのとき、庭にある見事な藤の木を彼はたいそう気に入つた。病床でそのことを鎌に告げると、鎌は王に懇願した。「藤原」姓をいただきたい。と。王は快諾し、鎌に対して直々に「藤原」姓を授けた。

鎌は涙を流して喜んだ。そして、先の戦、今後起こるであろう戦の役に立てない事を悔やみ、王に詫言た。

王は、気にするな、とそれを制した。一日も早く快癒し、宮中に戻るよう鎌を励ました。

まどろみの中を、意識がたゆたう。浮いて沈んで、また浮いて。後どれ程、繰り返せばよいのだろうか。この無為な、久遠は……

唐突に終わりを告げた。

「……、これ、なんのたね？」

「私の子供だ。君の友達だ。よいか、毎日水をやつて、きちんと世話をし、きつと立派に育てておくれ」

「うん、わかつた」

勢いよく走つて去つて行く少年。その背中に彼女は投げかけた。

「おーい、少年！ 名前は何？」

「れーじー、おねえちゃんは！？」

その問いに一瞬言葉を詰まる。そして、

「葵だ！」

「わかつた！ またね、あおいちちゃん！」

森をかけて去つて行く少年の背中を、葵は見えなくなるまで見送つた。

「……。良いのですが、藤原様」

大藤の裏から出てきたサリは、少し嬉しそうに問う。

「ああ、良いのだ。きつとね」

最近では桜の精が人間の男と番いになったと聞く。掟も緩くなったものだ。

彼の、いや、彼らの成長が、とても楽しみだ

その翌日、鎌は静かに息を引き取つた。側には妻と、子供たち。そして誰の目にも映らぬ葵が、最後の見送りを行った。

「藤原」の名は謫となった。

棺を見送る葵は、ふと視線を感じた。振り返るとそこには、息子の真人が、じつと彼女を見つめていた。

「……。もしやおぬし、見えておるのか？」

「やはり、あなたが葵様、ですな」

「すつと、見えておつたのか？」

「いえ、父から話を聞いておりましたが、お姿を拝見するのは、初めてです」

真人も二十歳の立派な青年に育つていた。その面差しは、若かりし頃の父によく似ていた。

「どうか……。神眼か。受け継いだのだな、そなたが」

たいして素質のなかつた鎌は、しかし葵と長い時間ふれあうことで、その素養を養つた。そして死することでその素養は息子に受け継がれたのだった。

「……。真人よ、頼みがある」

「その後、私の原本は森の入り口に種え替えられ、私自身はここに戻つた。家が分かれることに、我が原本から種子や枝をとり、その家に植えていった。だから、しばらくの間見守つていたのよ。しかし時が経ちすぎて、その血も随分薄くなった……」

緑と鎌は彼女の語りにも静かに耳を傾けていた。

「私も藤原を襲名してからは、藤原 葵と名乗つたことはない。今後名乗ることも、呼ぶことを許すこともない。その名を呼んで良いのは、我が夫のみよ」

その言には、有無を言わさぬ力が込められていた。

「しかし、此度生を受けた人の子は……」

「分かつておるよ、黒松殿。輪廻を巡つた、鎌の魂だと言いたいのだろう。しかしな、私の愛した鎌は、あの鎌なのだ。例え魂が同じであっても、それはもや別人だろうよ」

もはや鎌に語るべき言葉もなかつた。彼女の時間は、もう止まつてしまつたのだ。前へ進むこともせず、後にもどることもない。ただ柔らかな眼の中、時折幸せな頃の夢をみる。

鎌は幾度か口を開いたが、そこから出るは言葉にならない息遣いのみだった。

そしていたまれなくなつたのか、静かに立ち上がり、その場を去つた。

「出来ない弟ですすまぬ、藤原殿」

鎌の姿が見えなくなつた後、呆れたようにため息つき、緑は謝罪した。

「いや、わたしを感じてのことであろうよ。心優しい弟君ではないか」

「実を言うと、自慢の弟だ」

一瞬の間。そして、二人分の静かな笑い声が響いた。

「釈迦に説法とは思ふが、藤原殿。後悔せぬようにすることだ。我らの悔いは、恐ろしく長い」

「案ずるな。私もそう待たず世代交代さ」

その寂しげな笑みを最後に見やり、緑はその場を立ち去つた。

あとがき

此度の催しに参加してくださった方、本文を読んでくださった方に感謝を。初めまして、お久しぶりです。湊 葵です。

前回は童話風でしたが、今回は作風を変えてみました。失恋というよりは恋物語ですが、お楽しみいただけのなら何よりです。

以下、本文では分りづらかつた部分についての補足です。

お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、此度の相手役 鎌は、中臣鎌足その人です。研究では「足」は敬称であるので本名は鎌であったとする説があります。今回それは都合が良かったので採用しました。

この後、真人は僧となり、史人≠不比等の子孫が藤原家を栄華に導いていきます。

満月を歌に読んだ藤原道長はあまりにも有名ですね。

現代で言う藤原家とは道長の子孫のことを言います。家督として受け継いでいるのは、現代は五つの家、旧五摂家が残っています。

近衛家 総理大臣 近衛文磨が有名ですね。現ご当主は、日本赤十字社の社長です。

鷹司家 現ご当主は、伊勢神宮の大宮司さんです。

九条家 平安神宮の宮司さんです。毎年秋に、奈良の春日大社で行われる、藤原氏の末裔が集まる「藤原会」の会長も務めています。大正天皇の皇后様も九条家の方です。

一条家 現在のご当主は弁護士さんだそうです。皇族とも縁が深く、桂宮様のご葬儀の際には司祭長をつとめたとか。明治天皇の皇后様も一条家の方です。

二条家 最期の関白つとめた家ですね。現ご当主は、実業家だとか。

六百年代から現在に至るまで、その血筋を追えること自体もすごいことです。その連続とした、脈々とした血のつながりに、歴史を感じます。鎌はそんな彼らの基点であるのです。最期に出てきたれーじ君については、藤原家のこの家なのか、そもそも藤原家の血筋に生まれているのか、その辺りの設定はありませぬ。

それでは、改めまして Hiroko Tokumie の催しに参加していただき、ありがとうございました。これからも応援よろしくお願ひします。

湊 葵



*Aihiroko Tokumine*  
*Colita Wedding*